

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：21301

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01321

研究課題名（和文）インドネシア現代史の「失われた環」 日本軍政から見た戦後の社会

研究課題名（英文）"Missing Link" in Modern Indonesian History: Post-war society seen through Japanese military administration

研究代表者

山本 まゆみ（Yamamoto, Mayumi）

宮城大学・基盤教育群・教授

研究者番号：60709400

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 10,200,000円

研究成果の概要（和文）：歴史研究では、政治体制の変化で時間軸を「分断」する傾向がある。インドネシア近現代史では、第2次世界大戦で歴史を「分断」する研究が通例となっている。本研究では、日本占領期を、独立後のインドネシアの播種期と捉えなおし、日本占領期の軍の人脈、教育、文化・社会活動が、戦後インドネシア社会に与えた影響を検証することで、歴史の「連続性」や「継続性」を見出してきた。また、多角的に検証する本研究では、デジタル技術を活用し、デジタル・ヒューマニティーズ研究という新たな歴史研究を導入した。これにより、言語的困難さの解決に向けた日・蘭両語史資料の一部を英訳した。また、オンライン国際シンポジウムにより成果を公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の柱は2つあり、一つは日本占領期インドネシアの歴史で史料的重要性を占める、日本語史料および日本語による研究の国際化であり、二つ目はデジタル技術を歴史分野において有効活用をすることである。この2点から日本占領期インドネシアという時代をインドネシア近現代史の中で、分断された研究対象という位置づけから連続した歴史の一時代に捉えなおすことであった。国際学会での発表および国際シンポジウムの開催での発表、更にデジタル化の紹介を通じ、本研究の学術的意義を海外の研究者と共有することができた。今後の国際的な研究の場を提供するデジタル土壌を構築したことは、学術的にも意義のある研究になった。

研究成果の概要（英文）：History is often divided by the political events and system changes. In the case of Indonesian Modern History, World War two is often seen as the most critical historical breakpoint. However, in terms of human relationships, personal connections, the educational and social systems as well as military organization, this research revealed that the Japanese occupation period did not divide the history of Indonesia but rather can be seen as a period of germination for the next phase, Indonesian independence, or post-war Indonesian society. Application of digital technology to historical research came to occupy an important position in this project. Some of the collected original materials was digitalized and included in a new searchable database. Additionally, one difficulty for Japanese occupied Indonesia has been that researchers need to deal with multiple language materials. Through the promotion of digital humanities, some materials have been converted into English for future research.

研究分野：Historical Anthropology

キーワード：Indonesian History Japanese Occupation Post Colonial Studies

## 1. 研究開始当初の背景

日本占領期インドネシア研究は、東西冷戦期、米国の地域研究政策の一環として1960年代前から米国コーネル大学を中心に進められ、当初は、日本占領期のインドネシアを経験した Benda (1958) やハワイ出身で日本語に長けた Kanahale (1967) のように、日本語も含めた多言語の史資料も使い研究は行われた。しかし、その後、日本語という言語の壁から Anderson (1972) や Robinson (1995) のように、日本語史資料が限定的であるか、既に他の学者が使った一部の翻訳に依拠するばかりであった。一方、後藤乾一、倉沢愛子ら国内第一人者は、戦時下日本の情報を収集記録していたオランダの史資料が比較的少なく、成果の多くは日本語で出版された為、国外研究者への波及効果は限定的なものであった。オランダでは、第2次世界大戦中から史料を収集し、史資料の多さは比類ないものであったが、日本語という言語の問題を抱えると同時に植民地を失った経験と日本占領下の個々人の辛苦が、反映した研究が基礎になり (de Jong 1969-1994, van Velden 1963)、独自の発展を遂げ、多角的な研究に向かわなかった状況が続いていた。このように、夫々の「偏った」史料や各々の学問背景から構築された日本占領期インドネシア史は、国際研究の場において、その理解に齟齬が生じ、議論を難しくし、近現代インドネシア史において、戦前・戦後との連関が不明な「失われた環」となっていた。

多言語という問題から派生した一次資料の精査及び検証がないまま進められた研究は、現代の政治に翻弄され、政治色の強い視座で歴史を紡ぐ傾向にあり、次世代研究者から嫌忌されてきた。特に、日本占領期インドネシア研究者は、国内で激減している。国外では、インターネット技術の進歩により、今まで「史実」とされてきた紋切り型の歴史研究に疑念を抱き、日本語という言語の問題を抱えながらも、あえて日本占領期に興味を抱く研究者も世代を超えて増えている (Collins 2016, Pols 2016) 一方、アレゴリズムの関係からか、政治言説を先鋭化させかねない研究も行われつつある。

このような日本占領期インドネシア研究への懸念と国外研究者の需要を踏まえ、国外では少しずつ基盤整備へと努力を見せてきた。2010年にはオランダ戦争資料研究所(NIOD)が中心になり、*The Encyclopedia of Indonesia in the Pacific War* を、また CORTS 財団が防衛研究所監修の『蘭印攻略作戦』と『蘭印・ベンガル湾方面海軍侵攻作戦』を英訳し、それぞれ *The Invasion of the Dutch East Indies* (2015)、*The Operations of the Navy in the Dutch East Indies and the Bay of Bengal* (2018) としてライデン大学から出版した。また、日・イ国交60年の本年8月には、インドネシア文化庁とオランダ政府および倉沢愛子(本研究分担者)が中心となり、日本占領期インドネシアの史資料展示会をインドネシア国立図書館で開催した。このような海外での動きがあるものの、現存する日蘭両語の文献および史資料の分量を鑑み、未だ言語問題を孕んだ資料的困難さを抱えていたのが、本研究当初の背景である。

## 2. 研究の目的

本研究は、インドネシア近現代史の中で、政治的にも史資料的にも、「分断」された特殊な時期として扱われている日本占領期を、インドネシア近現代史の「蝶番」と位置づけ、連続した通史を国際研究の場で再構築することを考えた。本研究は、先行研究の史資料の問題を受け、また歴史研究の基礎的手法を重要視し、一次史資料の精査を行い、英語による紹介も含め、国際基盤整備に貢献することを目指した。特に、現存する史資料の多さを鑑み、社会や文化の連続性を詳らかにすることが可能な、人的・社会的ネットワークの中でも、軍人、教育、文化活動という点に着目し、占領期と戦後インドネシア社会との「連続性」や「継続性」が見出すことを目的とした。

本研究は、戦後のインドネシア社会に影響した、現代インドネシア史の「失われた環」とも言える日本占領期の空白を埋めること、また国際社会で共通の研究基盤を作ることとも目的とし、デジタル技術を使い、史資料をデータベース化し歴史の連続性を紹介することも目的とした。

## 3. 研究の方法

史資料の調査および集積史資料のデータベース化が研究方法の2つの柱である。

史資料に関しては、日本語、オランダ語、インドネシア語の公文書、当時出版された新聞・雑誌、回想録といった史資料を収集、整理、翻訳、分析し、日本占領期インドネシアの人脈や社会・文化活動また教育が戦後のインドネシア社会に与えた影響を検証した。特に、以下の2点に関して焦点を当て調査を進めていった。

(1) 日本占領期のインドネシア軍政の関係者、企業、法律制度、メディア、芸術、教育、地域社会等に関する人脈および活動を、公文書及び文献図書調査から明らかにする。

(2) 日本占領期インドネシアで出版された新聞、雑誌を収集し、教育や社会活動また人物に関する記述を精査検証し、当時の実態を明らかにする。

具体的調査の概略は以下のとおりである。 史資料調査から、軍政に関係した日・蘭およびインドネシア人に関するデータ抽出精査、データ入力。 軍政期および戦後の映像・録音の発掘保全。 当時インドネシアで出版した新聞、雑誌のデータ入力および一部デジタル化。 資料リストおよび資料内容抜粋の英文作成。 オランダ国立戦争資料研究所(NIOD)所蔵の戦後オランダが没



the Malaria War in Japanese Military Occupied Indonesia", "Our Medicine: Alternative Medicines for Malaria from Local Renewable Resources during the Japanese Occupation of Indonesia"発表を行い、また研究代表者がインドネシア国立アイルラング大学主催のレクチャーシリーズでも本研究を講演することで、海外への波及効果があった。デジタル化に関する、国際学会発表は、Mayumi Yamamoto (研究代表) "Addressing Challenges of Digitalization: A Nouveau Epoch of History in the Digital Era" (AAS annual conference at Boston, organizing and presenting a special round table session)の他、Horton, William Bradley, Suguri Hiroki も発表した。

論文発表・書籍出版論文発表

冷戦期の 日伊関係を扱った 2 本を山崎功( 分担研究者 )の他、Horton, William Bradley ( 研究分担者 ) "Digit Humanities in the Covid Era" Paramita: Historical Studies Journal, 32(2), 2022, pp. 243-252、倉沢愛子「戦後 77 年に想う：風化できぬ思い真実」『経済』No.324

書籍は、後藤乾一( 研究分担者 )『日本の南進と大東亜共栄圏』めこん 倉沢愛子( 研究分担者 )『ワクチン開発と戦争犯罪 インドネシア破傷風事件の真相』岩波書店「穀倉地帯から工業団地へ そして村はどう変わったのか」内藤耕編『工業団地がやってきた』風響社

### ( 3 ) 国際シンポジウム開催

本研究の総まとめとして、2024 年 1 月に 2 日間にわたり、国際シンポジウムを開催した。本研究代表および分担者に加え、国内外から日本インドネシア占領期の研究者を招集し、研究代表者の所属機関である宮城大学を会場とし、同時に本研究で収集した稀少文献および史料を展示した。インターネットを通じて配信も行い、同時に録画映像も残した。米国の大学院生も参加し、本研究が次世代へ引き継がれる形で行い、シンポジウムは、1 名のパネリストの日本語発表に同時英語通訳を入れた以外、すべて英語で行い、海外からもチャットの質問もあったため、国内外に本研究の成果を伝えることができた。本研究の主眼は 2 点あり、一つは「日本占領期インドネシア」が戦前と戦後を繋いでいるはずだが、現在のインドネシア現代史の中では、言語的な難しさから継続性を見出す研究は少ない。特に戦中から戦後への連関が見える研究は少ないということから、シンポジウムでは、法律、軍の体制、水のインフラ、戦後裁判と人脈、医学研究、インドネシア在住元日本兵等、継続性を紹介する研究を発表した。もう一つの研究主眼としては、本研究また本研究代表および分担者が収集した研究史資料のデジタル化を推進し、史資料(特にオリジナル史料)の散逸を食い止めると同時に、史料を基にしながら日本占領期インドネシアに関わったオランダ、日本、インドネシア等の人々の人物相関図を作成することであった。データ ベースを製作するにあたり、人文社会学者と情報科学を専門とする研究者の間で、膨大な資料の中から貴重なものの順位を決めて、データベースに反映した。人物相関図は、本研究分担者及び代表が執筆した書籍および論文からデータを取り出し作成している。2023 年度末には 100 人余の人物の相関関係及び各人の簡略版バイオデータが出来上がっている。最終年度の為、各研究者が国際シンポジウムのため研究の集大成を行った。

5 年にわたる、本研究を通じて政治・経済・文化に直接影響を与える人的なネットワークおよび戦前・戦中・戦後の連続性を見出すことはできた。また、COVID19 社会の中で、国際的にもデジタル技術が進み、インターネット活用が日常になった今、本研究の一翼でもあるデジタル・ヒューマニティーズは、これまで以上に国際的な研究の場を提供する土壌を醸成した。一方、本研究の中心が政治・経済・文化を先導してきたエリート層であったため、人種の違い、門地や経済的格差が大きいインドネシアの社会の全体像における日本占領期の連続性を明らかにするには、まだ課題を残していることが明白になった。市井の人々の生活を詳らかにすることで、日本占領期インドネシア社会の全体像を分析するという、今後の研究の必要性が明らかになった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Horton William Bradley	4. 巻 32
2. 論文標題 Digital Humanities in the Covid Era: The Perspective of a Historian of Modern Indonesia from Northern Japan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Paramita: Historical Studies Journal	6. 最初と最後の頁 243 ~ 252
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15294/paramita.v32i2.35583	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Horton William Bradley	4. 巻 1
2. 論文標題 A Cautionary Tale of Arrogance: How the US Government Shattered Harry Benda's Collaborative Translation Project on Japanese Scholarship on Wartime Indonesia	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Academic Letters	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山崎功	4. 巻 4
2. 論文標題 ヌグロホ・ノトスサントとインドネシア = 日本関係について（1）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 佐賀大学芸術デザイン学部研究論文集	6. 最初と最後の頁 135-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山崎功	4. 巻 5
2. 論文標題 ヌグロホ・ノトスサントとインドネシア = 日本関係について（2）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 佐賀大学芸術デザイン学部研究論文集	6. 最初と最後の頁 81-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 ホートン ウィリアム・ブラッドリー	4. 巻 75
2. 論文標題 Shifting Communication: Language learning during the Japanese occupation of Indonesia	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Memoirs of Faculty of Education and Human Studies, Akita University	6. 最初と最後の頁 11-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計17件 (うち招待講演 6件 / うち国際学会 14件)

1. 発表者名 Yamamoto Mayumi
2. 発表標題 Addressing Challenges of Digitalization: A Nouvea Epoch of History in the Digital Era
3. 学会等名 Association for Asian Studies (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Suguri Hiroki
2. 発表標題 Digital Archiving of Historical Records during the Japanese Military Era in Indonesia
3. 学会等名 Association fo Asian Studies (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Horton, William Bradley
2. 発表標題 Archival Documents on Japanese military Occupation in Indonesia
3. 学会等名 Association for Asian Studies (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Horton, William Bradley
2. 発表標題 Medicines and Advertisements in Indonesia, 1930s to the post-war era
3. 学会等名 EuroSEAS 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yamamoto Mayumi
2. 発表標題 Relationship Uncut: Prostitutes and VD in the Post-WWII Indonesia and Japan
3. 学会等名 Health Infrastructure and Asia's Epidemiological Transitions: Historical Perspectives (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yamamoto Mayumi
2. 発表標題 Chrysanthemum as a Sword: The Malaria War in Japanese Military Occupied Indonesia
3. 学会等名 EuroSEAS (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 Yamamoto Mayumi
2. 発表標題 The Unhidden, Forgotten History of Comfort Women in Indonesia
3. 学会等名 Airlangga University, Faculty of Humanities, History Program Lecture Series (招待講演)
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 Horton, William Bradley
2. 発表標題 Our Medicine: Alternative Medicine from Local Renewable Resources during the Japanese Occupation of Indonesia (1942-1945)
3. 学会等名 EuroSEAS (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年 ~ 2022年

1. 発表者名 Horton, William Bradley
2. 発表標題 Digital Humanities in the Covid Era: The Perspective of Historian of Modern Indonesia from Northern Japan
3. 学会等名 The 6rh International Conference on Education and Social Sciences (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年 ~ 2022年

1. 発表者名 高地薫
2. 発表標題 Military Personnel and Japanese Occupation Period Networks
3. 学会等名 EuroSEAS 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本まゆみ
2. 発表標題 The Man Behind a Defeated General 's Wining Life
3. 学会等名 EuroSEAS 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 ホートン ウィリアム・ブラッドリー
2. 発表標題 Wartime Experiences, Colossal Blunders and Renewed Friendships: Putting Faces and Historical Context into the Reestablishment of Japanese-Indonesian Relations in the 1950s
3. 学会等名 EuroSEAS 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本まゆみ
2. 発表標題 A Europeanized Samurai Goes to Java
3. 学会等名 ICAS 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高地薫
2. 発表標題 Multinational Silver Screen Dreams: Films Screened in Java during the War
3. 学会等名 ICAS 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 ホートン ウィリアム・ブラッドリー
2. 発表標題 “Djiwa Baroe”: The Malay Language Press during the Japanese Occupation of Java
3. 学会等名 ICAS 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 ホートン ウィリアム・ブラッドリー
2. 発表標題 A cautionary tale of arrogance: The Harry Benda translation of The Military Administration of Indonesia and the US
3. 学会等名 東南アジア学会2019年
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 ホートン ウィリアム・ブラッドリー
2. 発表標題 From Hero to Criminal (and Back Again): The Yellow Adventures of Baroness Orczy's Scarlet Pimpernel in Indonesia
3. 学会等名 Akita English Studies Association Annual Meeting 2019 (招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 後藤乾一	4. 発行年 2022年
2. 出版社 めこん	5. 総ページ数 330
3. 書名 日本の南進と大東亜共栄圏	

1. 著者名 内藤耕 (倉沢愛子「穀倉地帯から工業団地へ」担当)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 288
3. 書名 工業団地がやってきた	

1. 著者名 倉沢愛子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 274
3. 書名 ワクチン開発と戦争犯罪 インドネシア破傷風事件の真相	

1. 著者名 Horton, William Bradley (分担執筆) "Patjar Koenig and the Mysterious Death of Moh. Hoesni Thamrin"	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Institut Kajian Etnik, Universiti Kebangsaan Malaysia	5. 総ページ数 241
3. 書名 Laut Sama Direnangi: A Festschrift for James T. Collins	

1. 著者名 後藤乾一	4. 発行年 2019年
2. 出版社 龍溪書舎	5. 総ページ数 420
3. 書名 「南進」する人びとの近現代史ー小笠原諸島・沖縄・インドネシアー	

1. 著者名 倉沢愛子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Penerbit Buku Kompas	5. 総ページ数 236
3. 書名 Sisi Gelap Perang Asia: Problem Repatriasi dan Pampasan Perang Jepang Berdasarkan Arsip yang Belum Pernah Terungkap	

1. 著者名 倉沢愛子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 龍溪書舎	5. 総ページ数 480
3. 書名 倉沢愛子コレクション 軍政期インドネシア散逸希少文献彙報(1942~45)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>The "Missing Link" in Modern Indonesian History  <a href="https://lapangan.net/ring/about-our-project/">https://lapangan.net/ring/about-our-project/</a></p>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	倉沢 愛子  (Kurasawa Aiko)  (00203274)	慶應義塾大学・経済学部(三田)・名誉教授    (32612)	
研究分担者	Horton William.B  (Horton William.B)  (00625262)	秋田大学・教育文化学部・准教授    (11401)	
研究分担者	高地 薫  (Kochi Kaoru)  (30345178)	神田外語大学・外国語学部・講師    (32510)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山崎 功  (Yamazaki Isao)  (60267458)	佐賀大学・芸術地域デザイン学部・教授    (17201)	
研究分担者	須栗 裕樹  (Suguri Hiroki)  (80553859)	宮城大学・事業構想学群・教授    (21301)	
研究分担者	後藤 乾一  (Goto Kenichi)  (90063750)	早稲田大学・国際学術院（アジア太平洋研究科）・名誉教授    (32689)	
研究分担者	スリョメンゴロ ジャファール  (Suryomenggolo Jafar)  (40600440)	政策研究大学院大学・政策研究科・助教授    (12703)	削除：2019年10月7日

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Other Facets of Medical Studies on the Japanese Occupation in Indonesia	開催年 2019年～2019年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------